

隅っこに強く息を吐きかけるとそこに出てきた靄に急いで何事か殴り書きしました。

「朔」
「朔」
私はその言葉を鏡越しに読むと、少女に向かつてつぶやきました。

少女にはどうやら私が少女の名前が読み取ることができたのが伝わったようでした。その少女がひどく嬉しそうに自身の名前を繰り返して笑うのが私に届いたからです。私は何度も少女の名前をつぶやきました。そのたびに少女はその表情を嬉しさに満たしながら鏡の向こうから私に笑いかけてくれたので、私はみぞおちにそれまでに経験したことがないうねりを感じました。

その時ふと、私はもう日が暮れてから大分経ってしまっていることに気が付きました。外からは夜行の動物の鳴き声が聞こえます。父は私がいないことで心配している時分だろうと思つた私は目ぶり手ぶりでもう帰らなくてはならないことを少女に伝えました。父は私が何を言っているのか分からない様子でしたが、扉を開け外へ出てしまつた景色を見せると、どうやらわたしたちの伝えたいことが分かつてくれようでした。少女はひどく悲しそうな表情をしましたが、私は少女に「また明日も来るから」とだけ伝えると、どうやら少女は私の言いたくれないわかつてくれたようでした。私は御扉を開けるとすつかり暗くなつてしまつた外へと出ました。そして伝えたりと扉を閉めました。その間も少女は最後まで私を見つめていました。

家に帰るとちやうど家の者たちは食事の用意をしている所でした。お手伝いさんに何か手伝えることはあるかと聞くともうすぐできるのですよとの返事だったので、私はひとり困り裏のそばによつてさつき出会つた少女のことを考えていました。私はもしかすると夏の暑さにやられて朦朧とした意識の中夢を見たのではないかと考えていました。文字通り雪のように白い肌や額を見ていまして、食事の時になつて、私には座り食事をしている父に尋ねてみました。僕は今日村のはずれで女の子を見たよ。」

父は私をいじつと見つめました。

「そうかい、どの辺りでした？」

「川を越えたずつと向こうの所。」

「私とはつさに嘘をつきました。」

「そうか、」

父は私をまだじつと見つめていましたが、やがて自分の食事に目を落としました。

父は川の向こうには時折野伏の人らが山を越えるために山道を進んでいくからな。野伏の人の娘さんだったかもね。」

父はそれ以上喋ろうとはしませんでした。

私はそれから何回も、自分の時間を見つけては彼女に会いに神社へといきましました。はじめのうちには彼女の存在が信じられず、あんな少女のこともしませんでした。私の見た夢でいつの間にか消えてしまふのではないかと思つていきましたが、何回訪れても彼女は鏡の中で温かい瞳で私を出迎えてくれました。私を見つめると嬉しくなり、少女のそばへと駆け寄つていくのが常でした。私には彼女、朔が、外の世界を非常に知りたがつていて、よくに思えました。私は彼女の喜ぶ顔を見たくて様々なものを持っていきましました。辺りには彼女、朔が、外の世界を非常に知りたがつていて、置物等です。それらひとつひとつに朔は好奇の視線を向けていきます。ひとつひとつに指をさし、何をするためのものなのかを尋ねてくる仕事をするので私はそのたびに道具を手に取り朔に示してやりましました。

特に朔は写真や絵画に興味を示しました。当時写真はひどく高価で私の家にもあまりなかつたので、私はまわりの自然の風景を描いて彼女に見せていきましました。緑々と生い茂る樹々や隆々と流れる川の力強い流れ、どこまでも続く穏やかな田園風景。そのどれもが朔の興味を引いてくれた。私に届いたように私には見えな床の上に座りこちらを向いて姿勢を正してくれましました。私はあまり準備を始めることもありませんでした。当時の私の

